

第一章 1930年代と農青運動の特質

一 涯なき暗黒の世界―連続する農業恐慌

1930年代の、本書に於て記述するアナキズム革命運動―農青運動（注1）を理解するためには、この運動は、それまでの全体としては存在的アナキズムであった運動からは離脱して、革命的地理区画（注2）を意識的に樹立した実践的革命運動であるが、これを理解するためには、三つの大きな時代的特質を知ることが必要である。

（注1）当時、農村青年社の運動は農青運動とよばれ農青社の主張は農青イズムと言われた。農青は農村青年社の略称。

（注2）吾々はつとめて難解な用語や、外国語の濫用を避けた。アナキストは特殊のえらばれた人間でないというのが、吾々の信念だったので、また、吾々の状況にふさわしい用語として、自由コンミュンとは言わず地理区画、正確には革命的地理区画と言った。このことばはいかにも吾々に密着した用語として慣用した。

クロボトキン「近代科学と無政府主義」八太舟三訳、春秋社版昭和三年四月発行（世界大思想全集第三十四巻）の第十一項に下掲訳文が掲出されている。「コンミュン―即ち、小さな地域的単位―が社会主義者の新社会の基礎として考えられねばならない……」。

さきに、吾々が展開した革命運動が、従前の少数者のテロリズムとは全く異質の社会革命運動であった時代的特質の第一は、第一次大戦後の起伏継起した恐慌が1930年代においては、言語に絶する絶望的な涯しない暗黒の時代に際会したということである。この暗黒時代は当時を知らぬ現代の人々には到底理解できない性質のものであらう。

その詳細は次章にゆずるが、職をうしなったルンペンが都市に溢れ、農村では唯一の収入源であった傭師の大暴落、農業生産物価格の下落、製絲操短、操業停止により収入のみちを失い、独占資本、金融資本、高級官僚、封建的大地主をのぞいては、餓死の状況に追いこまれ、この世界の大恐慌は昭和四年にはじまって昭和八年（一九一三年）にわたって持続したのである。農青運動が胎動し、展開したのは、この時代であった。農青のアナキズム革命運動の展開を観念的の独善と言うならば大なる誤謬である。

戦後恐慌の第一次発生は大正九年（一九二〇年）三月、第一次世界大戦の終結によって惹起したもので、三月十五日、東京株式市場は突如大暴落し、鉄鋼、造船、綿業、製絲などの諸産業が大不況に追いこまれ七十三銀行、茂木商店、増田ビルブローカーなどが取付、破産し、労働者、農民が生活をうしなった（注3）。

（注3）これは、本章の第三項で述べることに関係があるが、ここで触れておきたい。この第一次恐慌による工場閉鎖によって都市失業者が増大、賃下げが行なわれ労働組合は圧迫され、しかも、戦争中三倍にはねあがった物価は下落せず、都市労働者は非常な苦境に陥ったが、ストは却って減少し、要求内容は受動的となり、労働条件の改善よりも、辛うじて解雇反対、賃下げ反対などを目的とするものがふえた——これらは恐慌時に於ける都市サンジカリズムの性格と傾向を示している。

第二次恐慌は大正十一年（一九二二年）三月、第三次恐慌は第二次の翌年の大正十二年（一九二三年）三月、政府は資本家救済のため四億円を放出し、度重なる信用膨張の結果、インフレが進行し、不況下物価上昇という、労働者、農民の困窮が加速度的に進行した（注4）。

（注4）こうした経済恐慌を前にして、労働戦線の統一が提唱されたことは周知の通りであるが、その結果行なわれた大正十一年（一九二二年）九月の大阪天王寺公会堂に於ける全国労働組合総連合結成大会は決裂した。しかし、労働戦線の統一などは本来実現する可能性はない。ボルの本国ソヴエトに於ては、レーニンが大正七年（一九一八年）春から、徹底的にアナキストとアナルコ・サンジカリスト（注5）狩りを開始し、大正八年（一九一九年）の末には、かれ等の大半はチエカの手によって処刑され、その数は数千名にのぼった（ヴォリン「裏切られた革命」）。すでに日本共産党は、公式には大正十一年（一九二二年）七月に組織され、十一月に第四回コミンテルン大会で承認された。

（注5）この問題も第三章で扱うのが順序だが、労働組合問題がとりあげられたので追記するが、レーニンは労働組合について「はいかなる場合にも、政治的指導のみが党に属し経済指導は労働組合に属する」といったことに同意できない」と主張し、党、ソヴエト、労働組合の三権分立論を反党イデオロギーとして攻撃し、労働組合は、党と政府の単なる下部機関にすぎないとした。

戦後恐慌の持続は、昭和二年（一九一七年）三月にいたって、第四次恐慌に発展した。これは三月十五日、東京渡辺銀行、あかち貯蓄の取付が全市各銀行に波及、地方にも飛火して、全国各地銀中十数行が休業した。さらに四月に入ると、鈴木商店が倒産、台湾銀行が休業、天皇家の預金銀行たる十五銀行も取付。この金融恐慌で休業した銀行は三十七行、そのうち、のちに再開したのは十五行で、残りは倒

潰したか併合された。このとき、四月二十二、二十三の両日は全国の銀行信託会社が一斉休業し、ついに若槻内閣は総辞職、かわって登場した田中内閣が三週間のモラトリアムを行なった。

このあと、金融恐慌の結果、莫大な預金を集中した寡占金融資本と独占資本のあと押しによって浜口内閣が成立し、かれらの要望によって極端なデフレ政策をとり、緊縮政策の一端として、例えば全官公吏の俸給手当の一割削減とか、合理化人員整理などを強行せんとしたが、その最大の狙いは、農民、労働者のこれ以上の耐乏生活を強要するものであった。この結果、デフレ不況はすべての分野に浸透した。そして、浜口内閣は昭和五年（一九三〇年）一月、金輪禁止の解禁を断行、平価は切上げられた（注6）。

（注6）昭和六年（一九三一年）一月、浜口内閣は、十二月に金輪再禁止が行なわれ、満州侵略をトップとする侵略戦争のための軍事費調達のための紙幣濫発が行なわれるに至った。

このデフレ政策に前後して、昭和四年（一九一九年）十月二十四日、突如、ウォール街に於て株式の大暴落がはじまり、これは忽ち欧州市場に波及、世界的大不況襲来のスクリーンが切って落された。

この巨大なる世界的大恐慌は、前述したように昭和四年（一九一九年）にはじまって昭和八年（一九二三年）に及んだ。この世界恐慌の性格を詳述することは本書の目的外のことであるので省略するが、それは資本主義それ自身の内的必然の矛盾によって、遂に表在化したものであり、決して経済政策などの過失によって招来されたものでなく、それは全く道徳のないものであった。

わが国の場合、すでにデフレ政策によって破滅状態に近接しつつあったところへ、世界恐慌の膠着によって第五次恐慌を惹起、前記のごとく、第五次恐慌は昭和四年十月に発生して四か年間持続した。しかも、日本資本主義の構造的欠陥であるアメリカ依存経済の根幹である生絲の対米輸出のはげしい衰退（注7）は、当時、吾国社会構造の60%を占める農業国日本にとって、筆紙につくしがたい大恐慌をもたらした。日本の農業恐慌は全日本の恐慌（注8）に置きかえることができる。

（注7）この恐慌の為、銀塊相場が下落し、中国産の繭輸出が増加させ、また、為替高のため、中国民族資本の成長を促し、対中国輸出も減少した。

（注8）このことは注目すべきであるが、農青運動が胎動した昭和五年（一九二〇年）当時のわが国の社会構造は、農村人口が60%を占めており、農業恐慌は、日本全体の恐慌に帰結した。

この恐慌が如何にはげしいものであったかについては、第二章に於て詳述する。

少くとも、これまでに述べたように、戦後恐慌の発生から、数次の恐慌を経て、全く道徳のない世界恐慌にさらされ、そのたびごとに大量解雇、賃下げ、失業、農作物価格下落、小作料引上、シエール、重税と度重なる生活の破滅に直面し、農民、労働者の意識構成に顕著な変革をあたえずにはおかなかった。農青運動はこの意識の内面から発生したものである。

二 帝國主義ファシズムの抬頭

こうした経済恐慌の対策として、支配階級が慣用する方法は、ファシヨ侵略主義に依存し、全アジアを日本帝國主義の植民地化するところの、使い古された軍國主義的思想にはかならない。ドイツに於ては、ヒトラーが1933年にナチス政權を樹立した。

この帝國主義ファシズムの最初の抬頭は、ロンドン軍縮會議に於ける天皇統帥權侵犯問題の發生である。これを起点として、軍部、政黨、官僚、好戦資本が日本帝國主義として一体に癒着した。昭和五年1930年十一月、西下する浜口首相は東京駅頭で刺され、翌六年1931年二月死亡した（この時点で農青のアナキズム革命運動はスタートした）。昭和六年1931年三月、大川周明、建川少将の三月クーデターが未遂に終わり、同年十月、建川、橋本、長等參謀本部を中心とする錦旗クーデター事件が發生した。若槻内閣は瓦解し、かわって成立した犬養内閣に少壮將校の傀儡、荒木が陸相として入閣した。

昭和六年1931年九月、柳条溝事件を第一歩として満州侵略を開始、昭和七年1932年三月、溥儀傀儡政權による満州国建国（注9）、これより少し前、昭和六年1931年二月、井上日召の血盟団による井上、岡暗殺、同年五月には軍部將校、下士官と愛郷塾橋孝三郎らによる五・一五事件が發生、犬養首相が暗殺された。ついで昭和十一年1936年二月、いわゆる二・二六事件が發生。対中国戦争は全面的に拡大しつつ、ついに昭和十六年1941年十二月八日、真珠灣奇襲攻撃によって太平洋戦争に突入した。吾々農青のアナキズム革命運動は、ファシヨの動向を察知し、この展望を把握して構成された。

（注9）加藤完治の立案で、日本の農業恐慌を解決するという名目で、日本農民の侵略的満州国移民が、軍、政府により強制的に行なわれた。「当時（昭和七年）満州移民は日本人には駄目だ」という空氣が充満していた。石原満州軍參謀、東宮大佐、板垣陸相等が移民に賛成し、第一次農業移民を決定。五百人の武装移民を北滿邊境、三江省永豊鎮に入れたが逃亡者が出て三百人に減少。昭和八年に第二次五百人を三江省湖南宮に、昭和九年、第三次三百人を浙江省綏寧に入れた。しかし、種々議論があり昭和九年末、擴大會議の結果、積極的に満州移民を強行する方針を決定。内地拓務省、現地関東軍が主管、昭和十一年一月には達成目標として、満州国内二十箇所に農家百万戸の農業移民計画樹立。この結果、昭和十年に第四次五百人、昭和十一年第五次千人、昭和十二年第六次千人、現在、第七、第八次一万五千人の移民計画進行中のこれとは別に、昭和十三年から、十五才から十八才までの農村少年を内地で二か月、内原で訓練、軍事、農業訓練を三年間、現地で教育される青少年義勇軍三万人の入植を計劃。満鉄一万キロの鉄路と、付屬地六百万町歩をこの武装青少年義勇軍をして守備せしめた。

吾国には六百万町歩の土地に五百六十万戸の農民が過少経営に喘いでいる。満拓公社は六百万町歩の耕地を取得している。農民が満州に分村すれば、一戸二、三町歩の耕地を取得できる。二百万戸が移民すれば、内地農家は三百六十万戸となり農業問題は解決する」（朝日新聞「東亜建設と農業」昭和十四年、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所長加藤完治執筆引用）

勿論、満州農業の知識欠如と、移民貧農の農具、役畜、家屋等の生産手段の欠如のため大半は小作人、兼業労働者に転落、終戦時に侵入し来った赤衛軍によって、日本農民の多くは悲惨な末路をとげた。こうしたファシズムを拒否する農民運動が、どのような戦略戦術を以ってアナキズム革命運動を展開したであろうか。

三 農青運動の基盤としての農民と、その意識構造

吾々は、アナキズム革命運動を展開するにあたって、その基盤を農民と農村においた。そのことは都市の存在的アナキストから農村偏重ではないかという多くの批難をうけた。しかし、最初にかれらに言いたいことは、一体、当時、革命的都市アナキズム運動は、一体、何処に存在したかを尋ねたい。そのようなものは本当に存在したのだろうか。それは実在もしなかったし、また、逆に言えば、農民から見ればアナキズム運動は都市に偏在したのが事実ではないか。しかし、そのような分派的な問題を争う意志は少しもない。

吾々がアナキズム革命運動を農民と農村に置いたについては種々理由があった。そのひとつは、経済恐慌に対する都市労働者の反応である。そのことに關しては本章の第一項の注(8)に示してある。恐慌時に於ける都市労働者の精神構造は消極的であり、一般に言えば、経済主義に墮する。次に述べることは、他の章のなかで再びあらわれると思うが、石川三四郎の印刷工聯合叢書「サンジカリズムの話し資料(8)のなかで、経済恐慌の際には労働者はストライキをしても勝味はないから、そのような場合には消極的な態度を採るべきである」という意味のことが述べられている。

事実、これも再出すると思うが、スペインに於て、昭和六年1931年十二月、初めて社会革命をはっきり目的とした反乱が行なわれた（アラゴン一州だけ、他の四十五州はゼネスト）が、サンジカリズム的なバルセローナは参加しなかった（ヴオリン）。ウクライナに於ても、アナルコ・サンジカリストはナバトグループに参加せず、マフノ運動を支援しなかった（アヴリッチ）。革命的労働者運動が結実するためには、それがアナルコとあたまたにつけようがつけまいがサンジカリズム的な経済主義組合主義を改革することが前提である。経済恐慌に直面して、労働者の意識が後退するということは、労働者の自然發生的な意識構造は経済主義であることを示唆している。

大正十一年（一九二二）ドイツでザクセン蜂起は失敗した。そして、世界の革命的気運は衰退した。しかし、さかのぼって一九一七年には、国全体の84%が農民であるソヴェトに於て革命が行なわれた。一九三〇年、インドに於けるガンジー運動は、殆んど明白な勝利に近づきつつあるが、インドはまぎれもなく農業国である。中国共産党も、初め武装蜂起による解放区政策をとったが、昭和十年（一九三五）抗日救国戦線路線に転じ、民主主義闘争に転じ、究極的には農業国中国の革命を達成した。農青当時於て、吾国の農業人口は60%を占め、性格的には農業国であった。経済恐慌は農業恐慌であり、農業恐慌は日本全体の死活の命題であり、農民の意識構造は都市労働者と比較して、それはどうであったか。

たとえば、大戦後恐慌の次年、即ち大正十年（一九二一）に於ける寄生地主の高率小作料の収奪に対する小作農民の抗争は、前年の恐慌期に比較して減少を示すどころか、かえって倍増して前年（一九二〇）の四倍たる一九二〇件にのぼった。

労働階級と農民の動向を対比すれば、前者が労働争議件数が下降し、そのうえ争議の性格が防衛的消極化するに反し、農民は恐慌に直面するにたがって、抗争は多発し、且つ要求は根本的、本質化する。長野県下に於ける小作争議件数を見ても、この主張は誤っていないことが立証される。

年次	小作争議件数
大正十二年一九二三	13件
昭和五年一九三〇	67件
昭和六年一九三一	75件
昭和七年一九三二	73件

右表で明かなように、農村恐慌の極大期たる昭和六年に於てもっとも多発している。しかも、問題はそれだけに止まるものではない。農民の闘争の対象は寄生的地主だけではない。その枠をはるかに越えて、農村の社会構造、封建的機構、保守的体制にまで対決をせまるものであるが、一般に言って、農民問題は、本来、こうした本質的問題を回避しては解決はあり得ない性質のものである。したがって、単なる経済闘争にだけ限局することはできない。

このことは言葉を替えて言えば、昭和五年以降の未曾有の農業恐慌に直面した、農民的条件は、必然的に革命的な性格を帯びざるを得なかったのである。この事実、農民を単に反革命の要素としてのみ規定していたマルクス・レーニン主義にもテーゼの変革を強いた（注10）、（注11）、（注12）、（注13）。

（注10）コミンテルン「二七年テーゼ」（昭和二年）に於ては、日本革命の推進力はプロレタリアート、農民、及び都市ブルジョ

アジーである。而して、農民は……その闘争に於て、ただ労働者階級の指導下においてのみ勝利を得ることができる。どの国の歴史を見ても、プロレタリアートに指導されないかぎり、農民運動は常に失敗すべく運命づけられることがわかる。プロレタリアートと農民との同盟は何れの階級の利益から見ても、絶対に不可欠である。しかしながら、この同盟は労働者階級が覇権をにぎるときにのみ、革命的となり、勝利を得ることができる……プロレタリアートこそは唯一の一貫した革命的な徹底的に革命的階級である。労働者及び農民のプロレタリアートに於けるプロレタリアートの覇権はまた農民の確信の欠乏、躊躇、予想されるその逡巡と動揺とを克服するためにも必要である。農民は小ブルジョアに属している……として、農民が都市労働者の下僕であることを要求し規定しているのである。

（注11）さらにその後の昭和六年（一九三二）年の「日本共産党政治テーゼ」に於ては、来るべき日本革命に於ける革命の推進力はプロレタリアートのみが、資本の権力と、決定的に、徹底的に闘争しうる階級である。プロレタリアートは吾国の生産関係に於て決定的重要性を有し、断乎たる革命的勢力である。さらに日本のプロレタリアートは革命の有力な同盟軍として、広汎な農業プロレタリアート、貧農を有している。……これらの層こそが、土地問題の革命的解決、農業革命の推進力たりうる。……しかしながら、土地問題、農民問題の徹底的解決はプロレタリア独裁の下においてのみ可能であることが実証的に証明されている。……農民戦争は都市プロレタリアート側からの指導によって、正しく発展させ得るのである。この場合は（注10）の農民の規定よりも、広汎な農業プロレタリアートは革命の有力な同盟軍であるというふうに格上げした評価がなされている。

（注12）そのあと昭和六年（一九三二）に「日本共産党政治テーゼ草案」が出されたが、こんどは、吾々のテーゼ草案は如何なる誤りを犯していたかとして撤回され「日本問題に関する新テーゼ発表に際し同志諸君に告ぐ」（昭和七年（一九三三））では、……「土地を得るが為にはプロレタリアートの指導の下に地主に対して行なわれる農民の闘争が、日本に於ける当面の革命の決定的任務に属す」という「事情の過少評価は日本の同志達によって犯された最大の誤謬である」として農民闘争の過少評価が叱責されている。

（注13）さらに同年の「日本の情勢と日本共産党の任務に於ては……すなわち農業問題、プロレタリアートの指導下に於ける農民の土地獲得の地主に対する闘争は、来るべき日本革命の枢軸の一つ、中心的任務の一つである。この事情の過少評価は日本の同志によって犯された最大の誤謬である……これによれば農民闘争が日本革命の枢軸であることを指定している。おそらくこの引用によって、共産党の農民に対する観念的な規定が、現実の前に、次々に変転して行つた過程が明白になると思う。しかし、この規定は昭和五年（一九三〇）に出されるべきであり、昭和七年（一九三二）では、すでにファシズムの勢力が農村浸透して来つつあり、すでに時期を失している。

別に共産党のテーゼを引用する必要はないが、これによっても、農民の意識構造に対するかれ等の評価の変遷がうかがえる。

吾々は存在のアナキズムとは別な道をたどったことは、すでに述べた。農青運動は最初からアナキズム革命運動であった。ただ、吾々は、少数者の創造的暴力といった個人的テロリズムに近接した方法は採らなかつた。この少数者の創造的暴力とか、民衆の内在的組織力とかといった、既成アナキズムのオプチミズムについては、恐らく第三章のサンジカリズムの中で言及すると思うので茲では省略したい。吾々は方法的に異つた方法を採用した。しかし、それに触れる前に、いまいち当時の社会状況がいかなる状況にあったかを検討したい。吾々のアナキズム革命運動は当時の社会状況の実存に対して近接した距離になつたかどうか。再度の党テーゼの引用で躊躇するが、あえて引用する(注14)。(注15)。

(注14) コミンテルン昭和二年(一九一七)「日本に関するテーゼ」によれば、「日本に於ける農民革命がすでに成熟し、ブルジョア民主主義革命が極めて現実の問題となつてゐる……かくの如く日本の経済状態は、直接に革命への道を示しているのであるが、イデオロギーのおくれていること、即ちレニンは客観的革命的状況の対比して主観的革命的状況と言つたが、その主観的革命的状況のおくれていることは、非常なる障害である」と述べている。別に付言を要しないと思うが、客観的革命的状況は、かれらの見るところによつても成熟していると分析しているものである。

(注15) さらに昭和七年(一九二二)テーゼに於ても、「最も近き将来に偉大なる革命的諸事件が起こりうる」として革命の実存を認識していたのである。

吾々は、この問題について、これ以上論議の浪費を止めよう。何となれば、この問題に直接の連関をもつ、当時の農村と農民の現状、特に信州農村と農民の実体について詳述する予定であるからである。

それから、いまひとつ、その論旨が革命そのものに直接関連を有するが故に黙過し得ないので、ここに於て言及しておきたい。昭和二年(一九一七)一月号「労働運動」誌上に於て八太舟三は「循環でも飛翔する人類の歴史」(注16)なる小論を掲載している。この要旨は歴史には必然性があるかという問題を提起して、それに対して、彼は、「歴史には論理的必然性はない」と自答している。

(注16) 右の問題は、唯物史観に関して書かれたものである。この論文は、群馬、黒色戦線社、複製版、八太舟三「無政府共産主義」第七頁に出てゐる。八太は、石川三四郎の発行していた「ディナミック」(月刊リーフレット)のディナミックという題名の言葉自体に対しても、アナキズムはディナミック(力学・自動運動)ではないという理由から、この題名に対しても批難を繰り返した。

八太は社会生理学という言葉を愛用した。この言葉は、クロボトキンの「パンの略取」(注17)、特に八太が愛用したクロボトキンの「近代科学と無政府主義」(注18)に於て述べられてゐる用語である。八太の畢生の念願は社会生理学の系統的大著にあつたのであ

る。これは果さなかつた。

(注17) 「パンの略取」黒色戦線社(注19)二八〇頁、幸徳秋水全集、明治文献版三五三頁。

(注18) 八太舟三、春秋社、昭和三年版世界大思想全集第三十四巻「近代科学と無政府主義」八〇頁。「我々は経済学が科学となる為には、それは異つた方法に於て築かれねばならないと思う。それは自然科学として扱われねばならぬ。そして、凡ての精密科学と実験科学に於て用いられる方式を用いねばならぬ。そして、それ自身の為には別な目的を辿らねばならない。それは植物及び動物に於て、生理学の占むるとき地位に相似る地位を、人間社会に於て占めねばならぬ。それは社会生理学であらねばならぬ。」

(注19) アナキズムの分野では黒色戦線という名の社名は頻出する。ここに出てくる黒色戦線社は、もつとも古くボビュラーなもので、アナキズム学生運動のA.C.聯盟の後身で、昭和四年(一九一九)二月、雑誌「黒色戦線」を創刊。昭和四年十二月末、サンジカリズム問題に端を発し、塩、植田、青柳等が退社、昭和五年(一九二〇)一月から誌名を「黒旗」と改題、昭和六年(一九二一)三月までに通計十六号を発刊。その間、黒旗叢書として、マラテスタ「無政府主義論」、パレット「アナキスト革命」、クロボトキン「パンの略取」(相沢、樋田、織田、平松、榎本、鈴木柳介訳)、「農民に訴ふ」(後掲、農青運動の基本となつたもの)、岩佐作太郎「革命断想」を出版し、また、海外パンフの邦訳を行なうなど本邦アナキズム運動に多大の理論的貢献をあたえた。以上の出版のすべてを通じ発行人は星野準二である。後に、農青出版物中に「黒色戦線」が出てくるが、これは上記のものとは無関係で、鈴木靖之、星野等によつて、農青の傍系出版物として出された。なお、上記の大学アナキズム研究会は、特に理由はなかつたが私学系は「A・C.聯盟」、官学系は「社会理想研究所」と岐れ、A・C.は思想誌「黒色戦線」、官学系は「社会理想」を出版した。

吾々の見るところでは、社会生理学は直接にはアナキズム史観に関係するとは考えないが、クロボトキンは別な場所(「近代科学と無政府主義」前掲四六頁)に於て「アナキズムはひとつの社会理想である」と書いてゐる。この言葉と八太の前述した「歴史には論理的必然性はない」という言葉は、おそらく背馳するものではなく、表裏の関係にあるであらう。卑近な意味で、アナキズムが理想主義であることは問題はないが、社会革命が単なる理想であるという意味であることとすれば、この論断は誤まつてゐる。勿論、吾々は唯物史観の史論に立脚する必然論を排除するし勿論、かれらの社会科学を否定することは言うまでもない。しかし、アナキズムをマルクス主義から区別するために、アナキズム社会革命が必然性の欠如した単なる理想主義であると言うのであれば、吾々は根本的に異論を有たざるを得ない。吾々は革命を恣意の分野でとらえようとする一切の社会思想には決して同意し得ない。

すべての社会革命は、その社会的矛盾に生物的に耐えかねたところの、生きるためにそうせざるを得ないところの、生物的必然に基因しての必然である(注20)。たとえば、最近の学生運動に於ても、上述の点に関し、「中核派」の諸君は、革命というものは、資

本主義の矛盾が人民の耐え得られないところまで来たとき、権力者に対して必然に向けられると、必然性に関するレーニンの社会科学を超越している。「革マル派」は招来される社会像を「コンミュン型」と規定して社会革命の無段階を唱えている。茲で、本書のはしがきに於て言及した日本無政府共産党「G.S.A.R.G.S.」について触れることは適當でないかもしれないが、おそらく他に適當な場所もあるまいと思うので、茲で触れるが、かれらは既成觀念の打破をはかるあまり、言いうるならば党の出發はかれ等が永年に亘つて抱懐したところのアナキズム理論の揚棄からはじまったのであらう、党の綱領はマルクス主義的であり（意外な感に打たれると思うが）史的唯物論、階級闘争説に立ち、アナキズムの基調である生物学的立脚点を疎外した。おそらくかれらはアナキズム運動の不振を、アナキズムそのものからの模索的離脱によつて、解決をもとめたのではないだらうか。いずれ何かの機会に党綱領成立の史的過程が明らかとされるであらう。相沢尚夫の回想記（「構造」所載は以上の点には触れていない）によれば、戦術的にはアナルコ・サンジカリズム（自協）と合体し、日常闘争を激発して、労農階級を結集し、かれらの主観にしたがえば、ゼネストとテロリズムによつて社会變革の達成をもとめる方向にむかわんとしたごとくである。

（注20）この点（アナキズム史観）については、他日、機会があれば詳論したい。

多少、岐路にはいったが、以上によつて、吾々が1930年代に展開した農青運動の背景となつた諸条件が明白になつたと思う。そこに発生した戦略とも言うべき、農青イズムのひとつの基調となつた添田晋「農民に訴う」（資料1）を以下に掲出する。